

高松市内遺跡発掘調査概報

－平成22年度国庫補助事業－

2011年3月

高松市教育委員会

例　言

- 1 本書は、高松市教育委員会が平成 22 年度に国庫補助事業として実施した高松市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
- 2 本書には平成 22 年度事業のうち、高松市内遺跡発掘調査事業として平成 22 年 4 月から 12 月にかけて実施した試掘調査および内容確認調査を 14 件、印刷時期の関係により昨年度概報に収録できなかった平成 22 年 1 月から 3 月の試掘調査 5 件、平成 21 年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業（屋嶋城跡）の内容確認調査について収録した。
- 3 調査は、高松市教育委員会教育部文化財課 文化財専門員 小川賢・渡邊誠・高上拓・波多野篤・船築紀子、非常勤嘱託職員 中西克也・中村茂央が担当した。
- 4 本書の執筆は小川、渡邊、高上、波多野、船築、大久保徹也（徳島文理大学）が行い、編集は高上が行った。
- 5 調査の実施にあたっては、次の機関および方々の御指導・御協力を得た。（敬称略、順不同）文化庁、四国森林管理局、香川県教育委員会、向井敏伸、大久保徹也・今田みゆき・田中優里・藤原義一・佐々木琢也・佐藤希・浅海瑛里香・佃瑞翔・中野実香・三瀬はづ希・渡邊友佳（以上、徳島文理大学）、森下英治・小野秀幸（以上、香川県教育委員会）
- 6 本書の挿図として、高松市都市計画図 2 千 5 百分の 1、2 万 5 千分の 1 を一部改変して使用した。前者は縮尺を 5 千分の 1 に改変し、使用している。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 8 本報告書の高度値は海拔高を表し、G.N が座標北、M.N が磁北を表す。

目　次

第 1 章 高松市内遺跡発掘調査事業（平成 22 年 1 月～12 月）	
神内城跡（確認調査）	1
高松城跡－本町地区－（事務所建設）	4
前田西町平尾地区（携帯電話無線中継所建設）	6
条里跡－香南町吉光地区－（無線基地局建設）	6
亀井戸跡（施設建築物建設）	7
中林遺跡（診療所・調剤薬局建設）	7
築地町地区（中部バイパス第 3 幹線工事）	8
香南町横井地区（香南幼保一体化施設建設）	8
特別史跡讃岐国分寺跡－第 38 次調査－（集合住宅建設）	9
特別史跡讃岐国分寺跡－第 39 次調査－（下水管敷設）	11
船岡山古墳－第 4・5 次調査－（内容確認）	13
国分寺町新居地区（高松西部地域文化施設建設）	20
多肥上町出口地区（多肥小学校校舎増築）	20
条里跡－香南町由佐地区－（香南支所・コミュニティセンター整備）	21
牟礼町牟礼地区（牟礼支所・コミュニティセンター整備）	21
空港跡地遺跡－本村地区－（営業所建設）	22
上林本村遺跡（集合住宅建設）	23
上林本村遺跡（集合住宅建設）	24
条里跡－香南町由佐地区－（介護老人保健施設建設）	25
第 2 章 平成 21 年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業	
史跡天然記念物屋島－屋嶋城跡 浦生地区－	26

じんないじょうあと 神内城跡

- 1 所 在 地 高松市西植田町
2 調査期間 平成21年12月1日～
平成22年3月31日
3 調査担当者 小川賢
4 調査の原因 確認調査事業
5 調査の概要

調査地は、春日川の上流、西植田の山間部末端に位置する中世の豪族神内氏が城主と伝わる山城跡である。城跡は台山と呼ばれる丘陵部を中心として比定され、この周囲は東西に流れる河川と背後の藤尾山山塊に守られた立地となっている。縄張りは明確になってはいないが、この台山の北と西側にある池を繋ぐように、かつて堀状の溝が存在したとされる。東側については、現状で南東部の池に繋がる水路や大きな段差が認められ、南部は背後の山塊と分離していることから、概ねこの台山および神内一族が葬られたと伝わる墓所が存在する高台部分を含めた範囲と推定できる。

墓所については平成13年度に実施した現地調査により、墓所に残る十数基の五輪塔群などの石塔が鎌倉時代後期から室町時代のものであることが判明し、市指定史跡となっている。これまでに、この高台にある中世墓所と台山北麓にある近世以降の墓所の間に位置する畠地からは宝篋印塔が出土しており、城跡の北部に墓域の広がりが想定される。また付近に「城屋敷」「的場」「本屋敷」などの地名が残るほか、背後の藤尾山山頂には社殿の造営や神鏡の奉納が伝わるなど神内氏との関係が強い藤尾八幡神社が位置し、中世的景観が残る地区となっている。

確認調査の対象である台山の山頂部は2段の平坦地からなるが、現状ではこの山頂部を中心に遺構の存在が認められる。この2つの曲輪で構成された山頂部は、高所の主郭にあたる曲輪とこれを取り囲む一段低い曲輪が南東部に広がっており、一段低い曲輪には土塁がL字状に配されており、主郭との境付近には虎口状の空間が認められる。頂部の南側の鞍部が堀切となっているほか、斜面にも小さな曲輪がいくつか存在するようである。

主郭は400m程の広さがあり、形状は長方形を呈するが南部がやや折れ曲がる形になっている。主郭の北側は切岸になっており、西および南側は一段低い曲輪が取り囲んでいる。

確認トレチは、主郭の西部に設定した。表土から30～40cmで、基盤層と考えられる風化した花崗岩に達する。竹林の根による搅乱は基盤層に及び、遺構確認が困難であったため、当初、幅1mのトレチを南北および東西方向のT字形に設定していたが、確認範囲を東方向に拡張し、検出した遺構の大半について掘削を行った。その結果、柱穴、土坑、溝跡を確認し、中国産青磁・白磁、染付、備前焼大甕、土師器皿、鉄釘の出土が認められた。溝跡は曲輪の縁辺に位置し、柱穴には建物跡が想定できる規模をもつものが含まれる。また遺構面では焼土や被熱した石片も部分的に検出した。出土遺物については小片が多いものの、中世後半を中心としたものと推定される。

まとめ

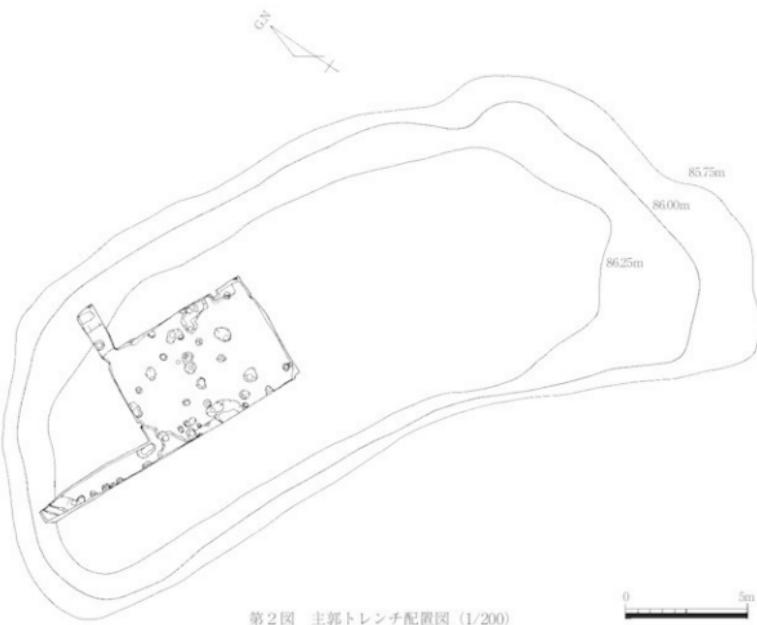
これまで調査の経験がなかった神内城跡であるが、今回の調査により遺構・遺物を包藏することが明らかとなった。今後は山頂部の曲輪を中心に調査を行うとともに、縄張りに関する測量調査を実施する予定である。



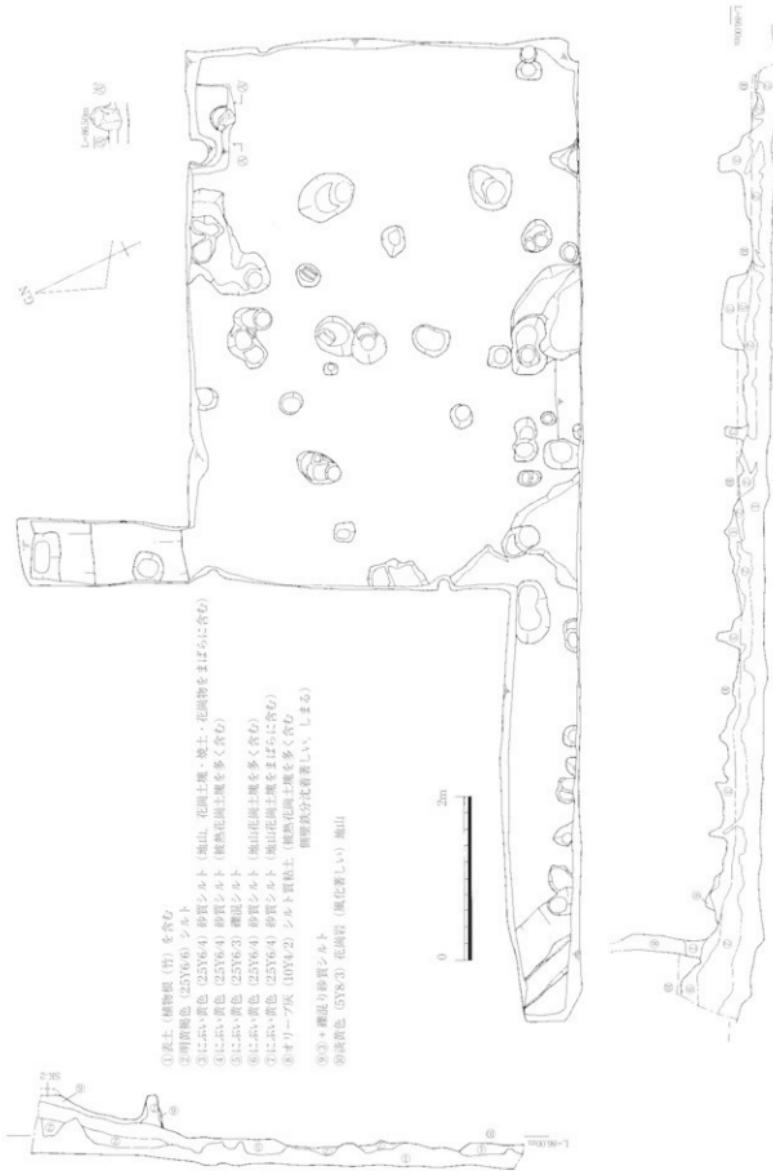
第1図 調査地位置図



写真1 主郭トレーンチ掘削状況（東から）



第2図 主郭トレーンチ配置図 (1/200)



第3図 主郭トレンチ断面図 (S=1/60)

たかまつじょうあと
高松城跡 -本町地区-

- 1 所 在 地 高松市本町
- 2 調 査 期 間 平成 22 年 2 月 16 日
- 3 調 査 担 当 者 小川 賢
- 4 調 査 の 原 因 事務所建設
- 5 調 査 の 概 要

対象地は古地図および近隣の発掘調査成果から、旧高松城跡の中堀と外堀の間に位置することが明白であるが、遺構・遺物の遺存状態により包蔵地に該当するか否かの判断を行うため調査を実施した。

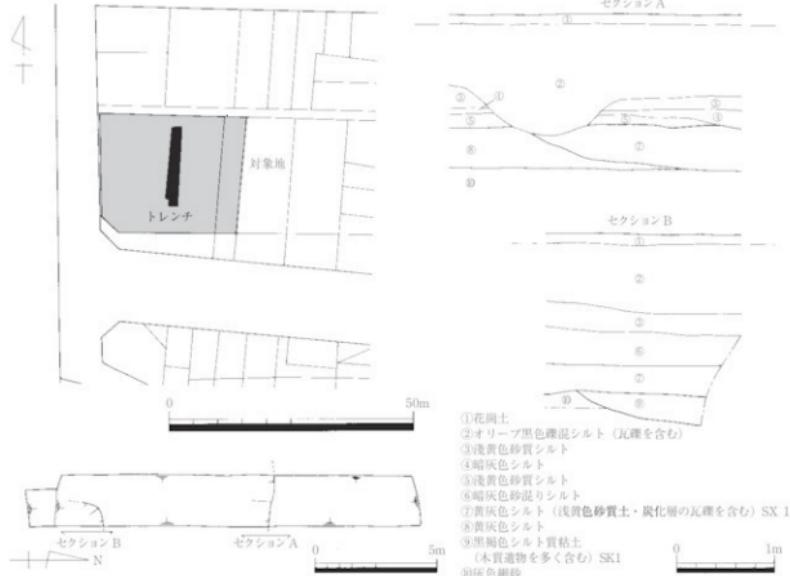
トレチは、対象地の中央で南北方向に設定した。その結果、砂堆上部に堆積する黄灰色シルト層上面で、落ち込み状の遺構 SX1 とこれの底面に取り付く SK1 を確認した。出土遺物から SK1 は中世末～近世初頭のもの、SX1 は近世後半以降に下る可能性が考えられるが、自然堆積層である砂堆まで大きく切り込み、中世の遺物を一定量含むことから、周辺に中世遺構の存在が推定される。

6.まとめ

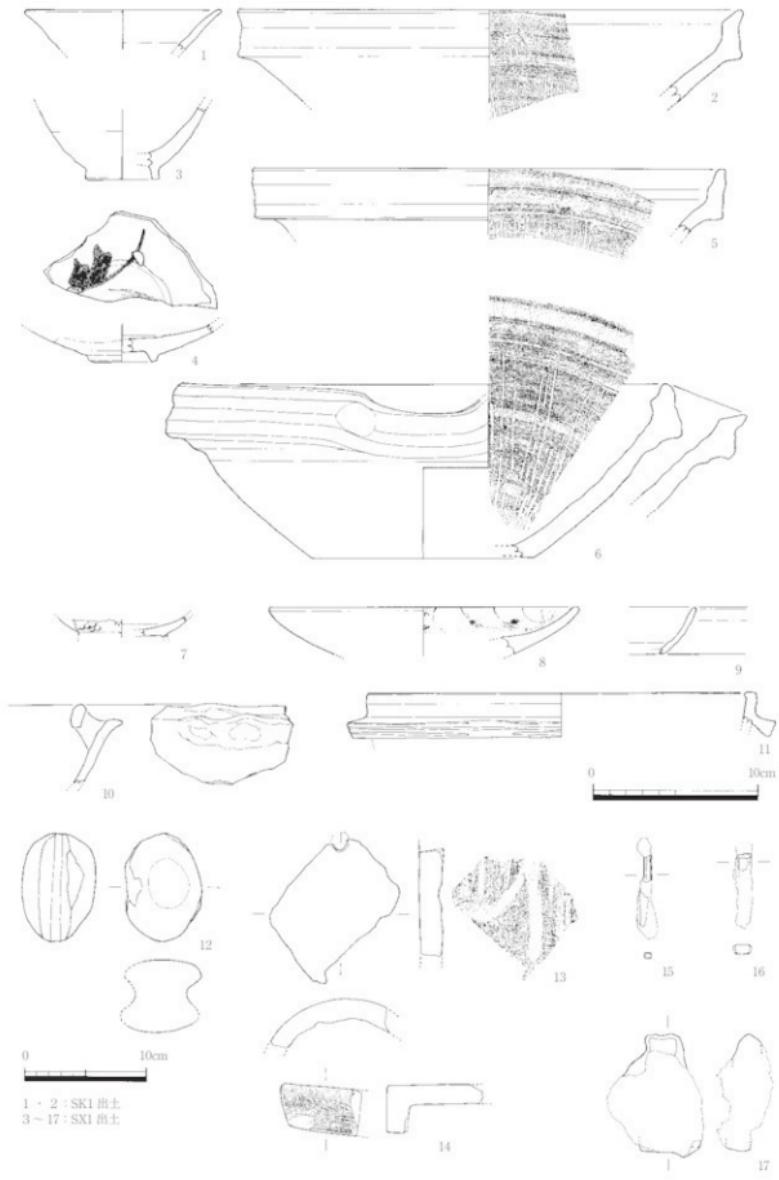
中世から近世に至る埋蔵文化財包蔵地であることが判明し、事前の保護措置が必要と判断される。



第4図 調査位置図



第5図 トレチ配置図 (1/1,000)・平面図 (1/200)・土層図 (1/50)



第6図 出土遺物実測図 (11~13:1/3, 12~17:1/4)

まえだにしまちひらおちく 前田西町平尾地区

- 1 所 在 地 高松市前田西町
- 2 調査期間 平成 22年2月17日
- 3 調査担当者 小川 賢
- 4 調査の原因 無線中継所建設
- 5 調査の概要

対象地周辺には、平尾1号墳など複数の古墳が存在することから、工事に先立ち確認調査を実施した。トレチは工事内容により、計画する工事深度に応じて浅い範囲を筋掘りとし、深度の深い範囲を面的に広げて調査を行った。後者のトレチ調査により、対象地は地山を削平した上で大きく造成を行っていることが判明し、埋蔵文化財も確認できなかった。

6.まとめ

上記の結果から、事前の保護措置は必要ないものと判断した。



第7図 調査位置図

じょうりあと 条里跡 -香南町吉光地区-

- 1 所 在 地 高松市香南町吉光
- 2 調査期間 平成 22年3月5日
- 3 調査担当者 小川 賢
- 4 調査の原因 携帯電話無線基地局建設
- 5 調査の概要

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である条里跡内に位置することから、工事の影響が及ぶ範囲について埋蔵文化財の有無を判断するために確認調査を実施した。トレチ掘削では、地山と推定される黄色粘土層およびこの直下に堆積する灰色疊混じり粘土層までを対象にして、平・断面で遺構・遺物の確認を行ったが、埋蔵文化財は認められなかった。

6.まとめ

上記の結果および工事内容から、事前の保護措置は必要ないものと判断した。



第8図 調査位置図

かめいどあと 亀井戸跡

- 1 所在地 高松市鍛冶屋町
- 2 調査期間 平成22年3月16日～4月2日
- 3 調査担当者 高上 拓・中西 克也
- 4 調査の原因 施設建築物建設
- 5 調査の概要

工事対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「亀井戸跡」を含む広範囲に及ぶ。平成22年2月24日付けの事業者からの確認調査依頼を受け、3月16・17日、4月2日の3日間で試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、東面・西面・北面の3箇所で石垣を検出した。これらの石垣の評価については本発掘調査報告書に委ねたいが、試掘調査後に実施した本発掘調査では複数の石垣を検出している。

6まとめ

試掘調査の結果、埋蔵文化財の包蔵状況が従来の範囲よりも広く確認できたため、埋蔵文化財包蔵地の範囲を変更した。試掘調査後、県教委および事業者に試掘調査の報告を行うとともに協議を行い、県教委の指導に基づき開発行為に先立つ発掘調査を実施することで合意が形成されたため、平成22年7月26日より発掘調査を実施し、同年9月30日に完了した。



第9図 調査位置図

なかばやしいせき 中林遺跡

- 1 所在地 高松市上林町
- 2 調査期間 平成22年4月16日
- 3 調査担当者 高上 拓・波多野 篤・船築 紀子
- 4 調査の原因 診療所・調剤薬局建設
- 5 調査の概要

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地「上林遺跡」に隣接しており、診療所および調剤薬局の建設が計画された。このため、本市教育委員会は事業者の任意協力の元、試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、現代耕作土の下層に黄灰色粘質土の遺物包含層があり、その下層が浅黄色粘質土からなる地山層であることが判明した。包含層は、奈良～平安時代に帰属すると思われる土器片を含む。造構は、包含層上面で溝1条とピット1基を検出した。

6まとめ

試掘調査の結果、埋蔵文化財の包蔵状況が確認できたため、新規の埋蔵文化財包蔵地であると認められる。包蔵地名は小字名を冠し、中林遺跡と命名した。試掘調査後、県教委の指導に基づき、開発行為に先立つ発掘調査を実施することで事業者と合意が形成されたため、平成22年6月21～26日に発掘調査を実施した。



第10図 調査位置図

つきじちょうちく
築地町地区

- 1 所在地 高松市築地町
2 調査期間 平成22年4月30日
3 調査担当者 小川 賢・波多野 篤・船築紀子
4 調査の原因 中部バイパス第3幹線工事
5 調査の概要

当地点は埋蔵文化財包含地にはあたらないが、以前に周辺で実施された発掘調査の成果により、遺構が分布する可能性があった。中部バイパス第3幹線工事事業に先行して試掘調査を実施することとなった。

建物予定地の2箇所でトレンチの掘削を行った。当地点の層序は6層に大別することができ、I層が小学校のグラウンドの現代整地土、II層が戦中・戦後の整地土、III層がにぶい黄橙色砂、IV層は黄灰色シルトで粘土ブロックを含み、畦状に堆積していることから、耕作土と考えられる。V層は灰黄色細砂で、植物依存体を含む。VI層は暗灰色粘土められ、植物依存体を多量に含む。III・V・VI層は

遺物はIV層から陶磁器片、瓦質土器片が出土した。

6 まとめ

以上の結果から、埋蔵文化財は確認できなかったため、事前の保護措置は必要ないものと判断した。

香南町横井地区

- 1 所 在 地 高松市香南町横井
2 調査期間 平成 22 年 8 月 18 日
3 調査担当者 渡邊 誠
4 調査の原因 香南幼保一体化施設建設
5 調査の概要

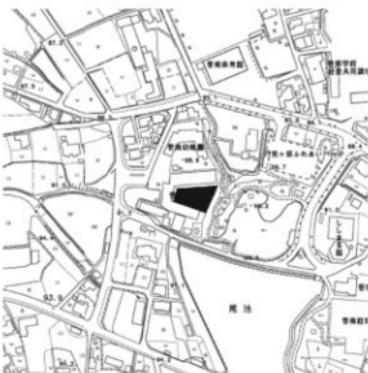
対象地は保育所の運動場であり、2箇所でトレーニングの掘削を行った。その結果、近現代以降の埋立てと考えられる堆積層直下で地山を確認したが、遺構および遺物は確認することができなかつた。

6まとめ

以上の結果から、埋蔵文化財包蔵地ではないと判断し、事前の保護措置の必要はないものと判断した。



第11図 調査地位置図



第12図 調査地位置図

とくべつしせきさぬきこくぶんじあと
特別史跡讃岐国分寺跡
～第38次調査～

1 所 在 地 高松市国分寺町国分

2 調 査 期 間 平成 22 年 8 月 5 日

3 調査担当者 船築 紀子・渡邊 誠

4 調査の原因 集合住宅建設

5 調査の概要

a) これまでの経緯と調査目的

今回の調査は、史跡地内のうちこれまで現状変更が許可されてきた寺域西側地区において、集合住宅建設に伴う事前の範囲内容等の確認調査である。調査の目的は、建設工事に伴う現状変更申請に際して、検討および協議を行うための基礎資料を得ることになった。そのため、調査は住宅等建設予定地中央に $3\text{m} \times 18\text{m}$ のトレンチを掘削し、遺構・遺物の有無を確認する方法を採用した。

さらに、必要に応じて遺構の掘削を一部行なった後、埋め戻して調査を終了した。

b) 調査成果（第 14・15 図）

① 基本層序

最上層は耕作土および造成土（花崗土）である。下層には灰色シルト、砂礫層が 2~3 層堆積している。さらにその下層が遺構面である黄褐色シルト質粘質土（第 6 層）で、周辺地域と同様な土層である。遺構面は北から南へと緩やかに傾斜しており、さらにトレンチ中央部から南にむかって落ち込んでいる。落ち込みの上層である第 11 層の暗灰黄色は砂礫混じりの粘質土層、さらに下層の 12~14 層は灰色系の粘質土で、瓦を主体とした遺物を含んでいる。さらに下層の灰色粘質土を埋土とする溝状の落ち込みは遺物が全く出土しておらず、詳細は不明である。

② 遺構

調査区の北側で方形の土坑、柱穴、溝状遺構を各 1 基確認した。遺構はいずれも遺構面より上層からの掘り込みで、遺構の埋土の継まりは弱く、35 次調査で確認した古代および中世に属する遺構埋土の色調および質と全く異なっていた。近隣の立会調査で確認した近世頃の埋土に似ており、以上の点から確認した遺構は近世以降の可能性が高い。

また、調査区の中央部分から南へと延びる落ち込みを確認した。この落ち込みの中から瓦が出土したため、古代以降に埋没したと考えられ、讃岐国分寺創建期の周辺地形を示すものと考えられる。検出面で湧水が認められた。

③ 出土遺物

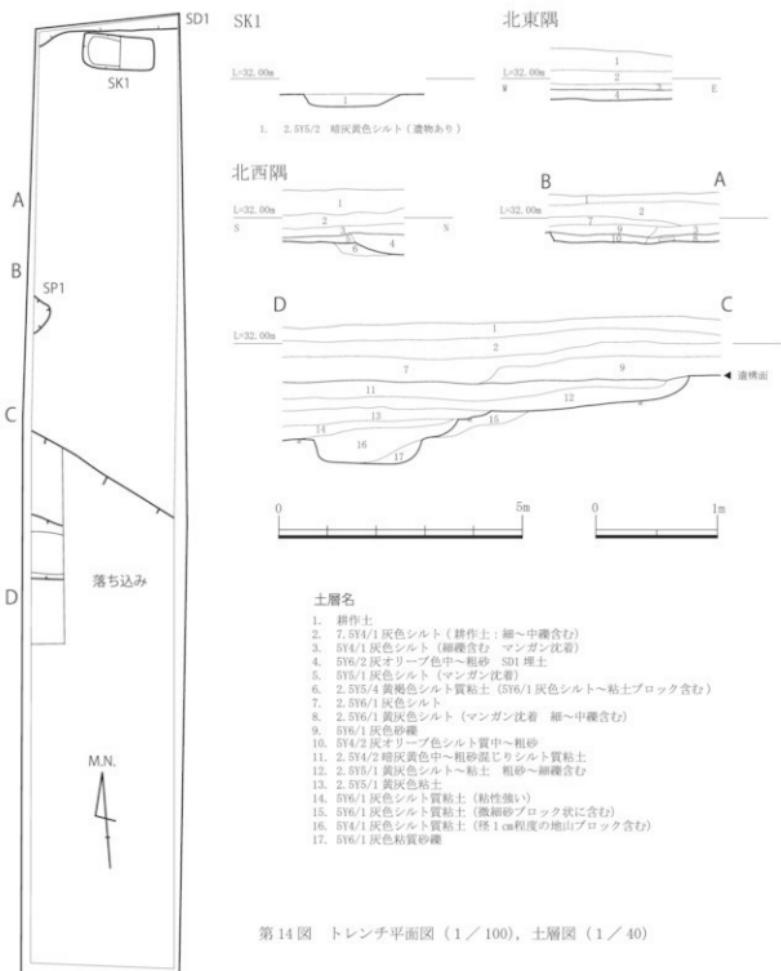
遺物は 27.3 ℥ コンテナ 1 箱分の瓦と数点の土器である。第 15 図の 1~3 は土師器杯、4~6 は土師器碗である。7 は須恵器杯、8 は須恵器壺、9 は須恵器壺の口縁部片である。

6 まとめ

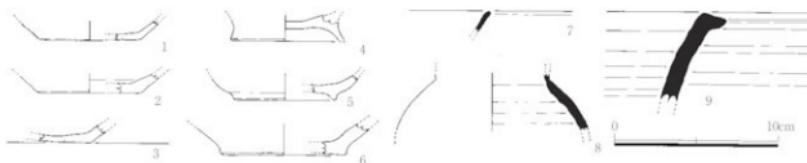
調査の結果、遺構・遺物は非常に希薄で、讃岐国分寺に関連する明確な遺構は確認できなかった。また、調査地の現地形は周囲より低いことから、当初より野間川に伴う低地もしくは氾濫の影響を受けやすい範囲であったと想定していたが、今回の調査によって、その想定を裏付けることができた。



第 13 図 調査位置図



第14図 トレンチ平面図 (1/100), 土層図 (1/40)



第15図 出土遺物

とくべつしせきさぬきこくぶんじあと
特別史跡讃岐国分寺跡
～第39次調査～

1. 所在地 高松市国分寺町国分
2. 調査期間 平成22年10月20日
3. 調査担当者 渡邊 誠
4. 調査の原因 下水管敷設
5. 調査の概要

a) これまでの経緯と調査目的
今回の調査は、史跡地内における下水管敷設に伴う事前の確認調査である。調査地は南面築地塀跡が想定される範囲に位置しており、敷設工事に伴う現状変更申請の検討および協議を行うための基礎資料を得ることを目的に調査を実施した。調査は、工事予定地のうち掘削が可能な範囲に1.3m × 9m、1m × 3mのトレンチを掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。一部必要に応じて遺構の掘削を行なった後、埋め戻して調査を終了した。



第16図 調査地位置図

b) 調査成果（第17・18図）

① 基本層序

最上部の1・2層は近現代の造成土である。3～8、10～15層は古代から近世にかけての堆積土で、10・11・12・14層は褐色系を呈する非常にしまりの弱い堆積土で近世以降の遺物を含んでいる。9層は浅黄色粘質シルトの地山である。地形は北から南へと緩やかに傾斜している。地山の上に堆積している6～8層の堆積土はしまりがよい。

② 遺構

トレンチ掘削範囲の中央部に浄化槽の配水管が通っており、大きく搅乱を受けていることがわかった。また、北側でも南東方向にのびる配水管を確認した。これらの配水管の東側では搅乱は認められず、地山面を確認することができた。トレンチ最南部で土坑状の落ち込みを確認したが、遺構であるか、南側に隣接する暗渠排水の掘り方に伴う搅乱であるかは判断できなかった。地山面および土層観察からも古代讃岐国分寺に関連する遺構を確認することはできなかった。

③ 出土遺物

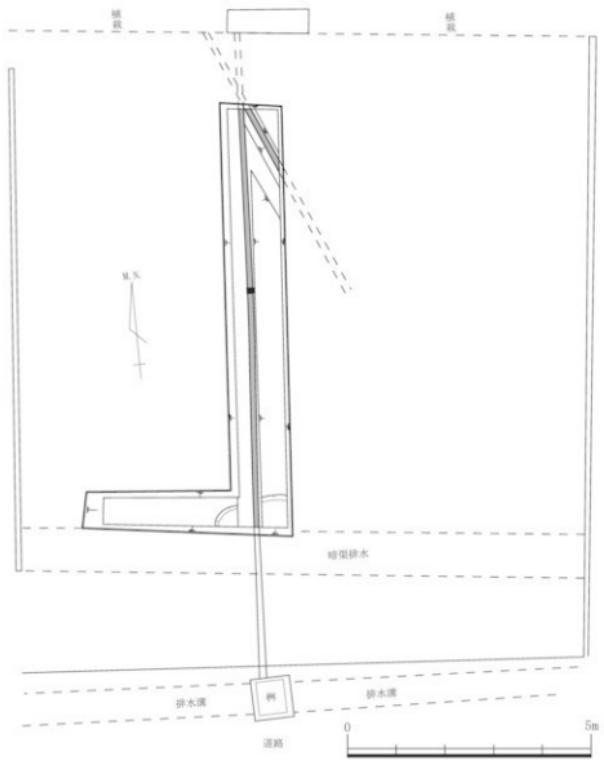
遺物も非常に希薄で、地山面の上層8層や11層で瓦等が僅かに確認できた状況で、当該地および近接地に瓦葺きの施設があったとは考えられない。第17図は鉄製品である。

6 まとめ

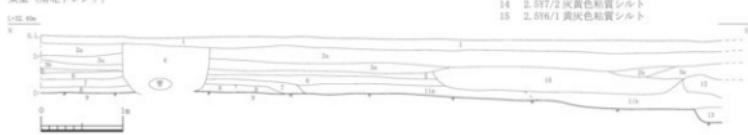
調査の結果、遺構・遺物は非常に希薄で、讃岐国分寺跡に関連する明確な遺構は確認できなかった。今回の調査地は24次調査（＊）と同様に南面築地塀跡の想定地であったが確認できなかった。築地塀跡は削平されたと判断された同調査より地山面の標高が低いことから、今回の調査地は、それ以上に削平が著しいものと考えられる。



* 24次調査は平成3年度に史跡整備に伴い、回廊南東隅および南面築地塀跡の想定地で確認調査を実施し、後者は瓦の堆積した落ち込み（溝）を確認したが、築地塀跡（基壇）は確認できず、削平されたと判断している。



東壁（南北トレンチ）



- 1 造成土 2a 花崗岩 2b 花崗岩が細かい、
2. 5V7/3 黄褐色粘質シルト
- 3a 2. 5V7/4 黄褐色粘質シルト (粘性強い)
3b 2. 5V7/5 黄褐色粘質シルト (粘性弱い)
4 为クラーク (碎木帶)
- 5 2. 5V7/4 淡黄色粘質シルト
- 6 2. 5V9/1 淡灰色粘質シルト
- 7 2. 5V9/1 淡褐色粘質シルト (5層を多段に含む)
- 8 2. 5V9/1 淡褐色粘質シルト
- 9 2. 5V7/4 淡黄色粘質シルト…堆山
- 10 10V9/1 淡黄色粘質シルト (近世～近代の遺物含む)
11a 10V9/1 淡灰色粘質シルト
- 11b 8層と層云
12 10V9/2 淡黄褐色粘質シルト (瓦を含む)
- 13 8層・地盤鉢
- 14 2. 5V7/2 淡黄色粘質シルト
- 15 2. 5V7/1 黄灰色粘質シルト

第18図トレンチ平面図（1/100）および土層図（1/60）

ふなおかやまこふん
船岡山古墳（4次・5次調査）

1. 所在地 高松市香川町大野・浅野
2. 調査期間 平成22年2月15日～3月10日
(4次)
- 平成22年8月17日～9月9日
(5次)
3. 調査担当者 高上 拓・船榮 紀子
4. 共同調査者 徳島文理大学文学部文化財学科
大久保 徹也 教授
5. 調査の原因 重要遺跡確認調査
6. 調査の概要

平成20年度より地権者のご協力のもとに実施している、船岡山古墳の第4・5次の確認調査である。なお、本市教育委員会と徳島文理大学文学部は平成22年2月1日に連携協定を締結し、本古墳の発掘を共同調査として実施している。以下では本市教委が調査を担当した9トレンチについて記述を行う。

9トレンチは、前方後円墳である1号墳の西側くびれ部の検出を目的として設定した調査区である（第20図）。墳丘上に設定した調査主軸に沿って、南北幅2m、東西幅5mを測る。当トレンチは、3～5次にわたり調査を実施したため、それぞれの調査概要について簡単に説明する。3次調査では埴輪片と安山岩板石や小円礫を多量に含む堆積層の上面を検出し、4次調査ではこの堆積層の断割り調査を行った。その結果この堆積層が流土であることと、流土下に地山を削り出して整形した墳端が残存する可能性が考えられたため、5次調査で流土をトレンチ全面に渡って除去した。その結果、くびれ部を含む墳端の石列が良好に残存する状況を確認した。確認した石列の状況について以下で記述する。

検出状況 調査範囲内で少なくとも内外2段の石列を確認した。外側の石列は地山を削り出して形成した階段状の段を利用して構築している。石列の外方に地山を削り出した平坦面が広く認められることから、墳端にある可能性が高い。標高84.6m付近で北西側から弧を描いて南東側に伸び、墳丘主軸から西へ5m、S4から南へ4.7mの地点で明瞭に屈曲して前方部へ接続する。ただし、くびれ部の前方部側は一部攪乱により石列が崩落していた。内側の石列は外側の石列との間に幅約0.9m程度の平坦面を隔てて構築される。墳丘主軸から西へ4.2m・S4から南へ4.1mの地点で屈曲し、前方部と後円部の石列が接続する。なお、前方部側と後円部側の石列構築の先後関係については、接続部を精査したが確認することができなかった。

石列の構造 検出した石列は内外ともに、同様の構築方法をもつことを確認した。調査成果から構築の手順を復元すると、①地山を削り出して階段状の段とテラス状の平坦面を整形する。②地山削り出し段の前面に沿って、径20～50cm程度の大型の角礫を列状に並べる。また段の内側の平坦面には、地山起源と考えられる拳大の不定形礫や円礫を敷き詰める。③大型の角礫のさらに前面に安山岩の板石を複数枚垂直に積み重ね、墳端を形成する。安山岩の板石積みは、残存状況の良いところで高さ約20～30cm、枚数にしておよそ6～7枚の垂直積みが確認できた。ただし、流土中に混入する石材の量と状態から推察して、石列の上部は特に大きく崩落したことが明らかであり、石列の本来の高さについての情報を得ることはできなかった。

墳形 3次調査で確認した1トレンチと、今回9トレンチで検出した墳端の形状から、1号墳の後円部の規模が推測できる。5トレンチで前方部前端も確認しているため、1号墳の墳形は全長約47m、後円部長約20m、前方部長約27mの前方後円墳であると推定できる。

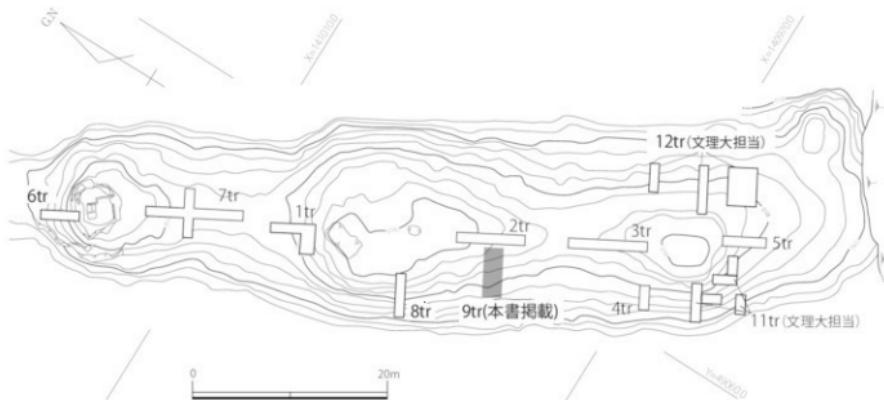


第19図 調査位置図

遺物出土状況 墳輪片の多くは内側の石列よりも谷側の堆積層中（4・7～9層）から出土した。特に7～9層では比較的大きな埴輪片が多数出土しており、器壁の磨耗もあまり認められない。ただし、原位置を保つ個体は皆無であり、墳端石列起源の石材を多量に伴うことから、墳端の崩落に伴う堆積層中から検出した状況である。また、他のトレンチでの状況に比べて、堆積した土砂の量が非常に多いことが注目できる。堆積層中から、少数であるが中世の土師器片も検出しているため、墳丘の削平とくびれ部の埋没が後世の意図的なものである可能性も考慮しておく必要がある。

7.まとめ

今回の調査では、1号墳の西側くびれ部の位置を確定することができた。このため、墳形をより正確に復元することが可能になった。また、くびれ部の墳端を区画する石列が、少なくとも内外2段で段築されていること、その構築方法が明らかになった。調査結果から地山の加工と選択的な石材の使用による入念な構築工程を復元することができる。これまで他のトレンチで確認した墳丘の構造と比較検討し、古墳全体の構築方法の特徴について明らかにしていく必要があるだろう。今後も継続してこれらの課題の解明に向けて取り組む予定である。（高上）



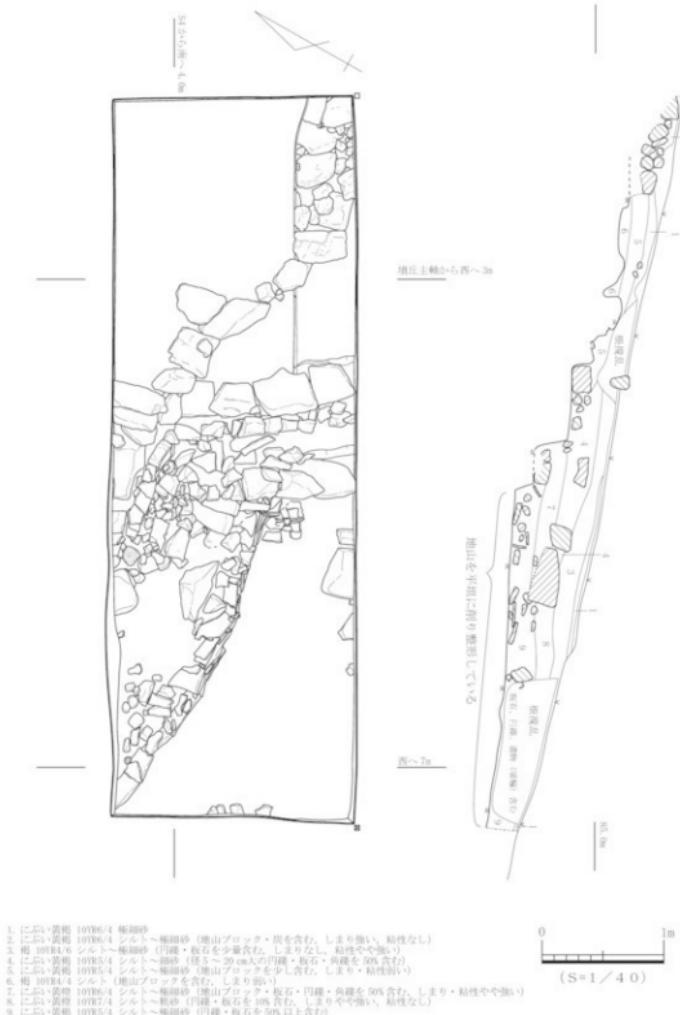
第20図 トレンチ配置図（1/500）



写真2 9トレンチ墳端石列検出状況（南から）



写真3 9トレンチ墳端石列検出状況（西から）



第21図 9トレンチ平・断面図 (1/40)

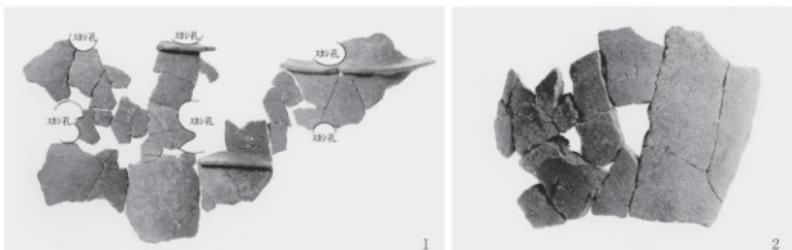


写真4 船岡山古墳出土遺物①

出土遺物、とくに埴輪類について

ここでは本墳で最も埴輪類がまとまって出土した西くびれ部(9tr)の資料について報告する。一部は既出土資料と接合できた。小規模な調査範囲であるが7~10個体程度は復元できそうだ。本地点では後円部上半の構造物に由来すると見られる多数の角礫・小円礫・板石が埴丘斜面~裾部を厚く被覆するように堆積し、本地点出土埴輪の大半は崩落石材中に混在し、今のところ埴輪類樹立位置を直接示すことは難しい。ただし前方部を含め他調査区の検出量がごくわずかな点と合わせ、崩落石材群を後円部上半の構造物に由来するとすれば、埴輪類の主たる樹立位置が後円部頂ないし上半部に想定することも不可能ではない。今後の調査に向けて一つの仮説として提示しておきたい。

さて昨年度の報告では、資料が限られていたが円筒「系」の埴輪と壺形埴輪の併用を想定した。しかし今年度調査の結果、先に壺形埴輪の可能性を推測したものは円筒「系」埴輪の一部であることが判明した。現時点では壺形埴輪の存在は確認できない。まずこの点を訂正しておく。

以下、掲載資料ごとの特徴を略述し、最後にごく簡単に全体的な様相について述べる。

第23図-2(写真5-3)は口縁部~最上段突帯の破片で口縁部径約26cm。およそ1/4周強を残すので復元径は信頼できる。

二重口縁を呈し頭部は短く、立ち上がり部の反りは強くない。屈曲部を強く突出する。口縁部と最上段突帯の間(以下、頭部と呼ぶ)は高4cm強と短くやや彎曲気味に強く内傾する。接合しないが図示資料の同一個体片で頭部に小形の円孔スカシを見る。段あたり孔数は不明。断面矩形の突帯は強く突出し、口縁部内外面は横ナデ、頭部外面は縦/斜方向の粗いハケ調整、内面の上端まで削り上げる。口縁部内外面と頭部以下外面に赤色顔料塗布。

第23図-3(写真5-4)は最も形状が復元できた個体である。他に比べ全体に肉厚。口縁部・頭部から体部は二段分の様態が判る。口縁部径は約32cmと一回り大型だが、これは頭部の内傾が弱くまた口縁立ち上がり部の反りが強い為。突帯部径は28cm前後で第23図-2と異ならない。第一・第二段突帯間隔は約16cm、頭部は第23図-2個体より長いが体部段の半分以下。頭部および体部第一段・第二段には各々三角形スカシ孔を施す。段あたり四方か。頭部・第一段ではややずれるが縦列に配し、第二段ではおよそ45度ずれる。頭部は不詳だが他段の一部ではスカシ孔外縁に沿った縁取り状の線刻を伴う。口縁部の基本形は1と同様で頭部は短く屈曲部を強調する。残存する二段の突帯は突出が強い。端面は丸みを帯び銳利な刻み目をやや不規則に施す。体部から頭部の外

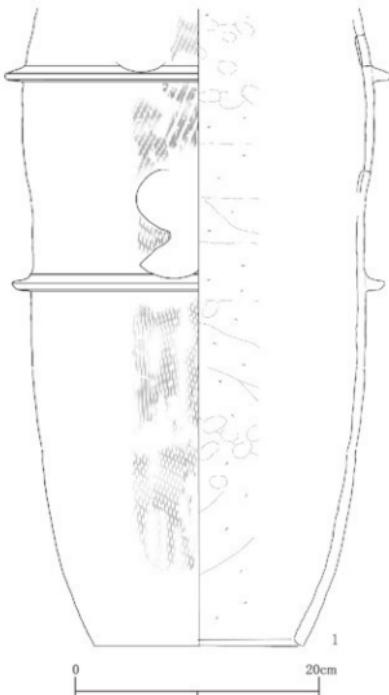


写真22 船岡山古墳出土遺物実測図①

面は緻密な縦ハケを施し、頭部～口縁部は横ナデ仕上げ。体部～頸部内面は縦ケズリで終える。スカシ穿孔後外面に赤色顔料を塗布する。

第23図-4(写真5-6)は体部片。接合しないが第23図-5・6とは同一個体の可能性が高い。突帯部径は上段15.5cm、下段14.5cm、突帯間隔は約14.5cmを図る。突帯は強く突出するが段によって断面形状は異なる。突帯間は約1/6周残存するがスカシ孔は不明。突帯貼付前に粗い縦ハケ、内面はその後全体を縦ケズリで仕上げ部分的にハケ目が残る。やはり外面に赤色顔料塗布。

第23図-5(写真5-7)は突帯部径30.8cm、残部から突帯間隔は14cm以上と推定できる。破片上位段に円形基調のスカシ孔二箇所が見える。間隔から段あたり四方と推定できる。下位段のスカシ孔有無は不明。施されている場合、縦列配置にはならない。さて残存する二孔の一方はほとんど突帯に接する位置に尾部を置く巴形で線刻は伴わない模様。もう一方はやや高い位置に円孔が位置し、尾部は見えない。その代わりに孔縁と突帯の間に、左端で収束する3本の弧線文を配する。線刻はラフで乱雑な引き直しの痕を残す。内外面の調整は第23図-4と同様で、ごくわずか赤色顔料の付着を認める。

第23図-6(写真5-8)は底部第一段片。破片が小さく復元径は目安である。最下段突帯から内骨氣味にすばまり底部に至る形態となる。底部高は約23cmと高くスカシ孔の痕跡はない。外面下端まで粗い縦ハケが及ぶ。内面は基本的に縦ケズリで下端付近は横方向のケズリを加え、自重による漬れの補正を図る。

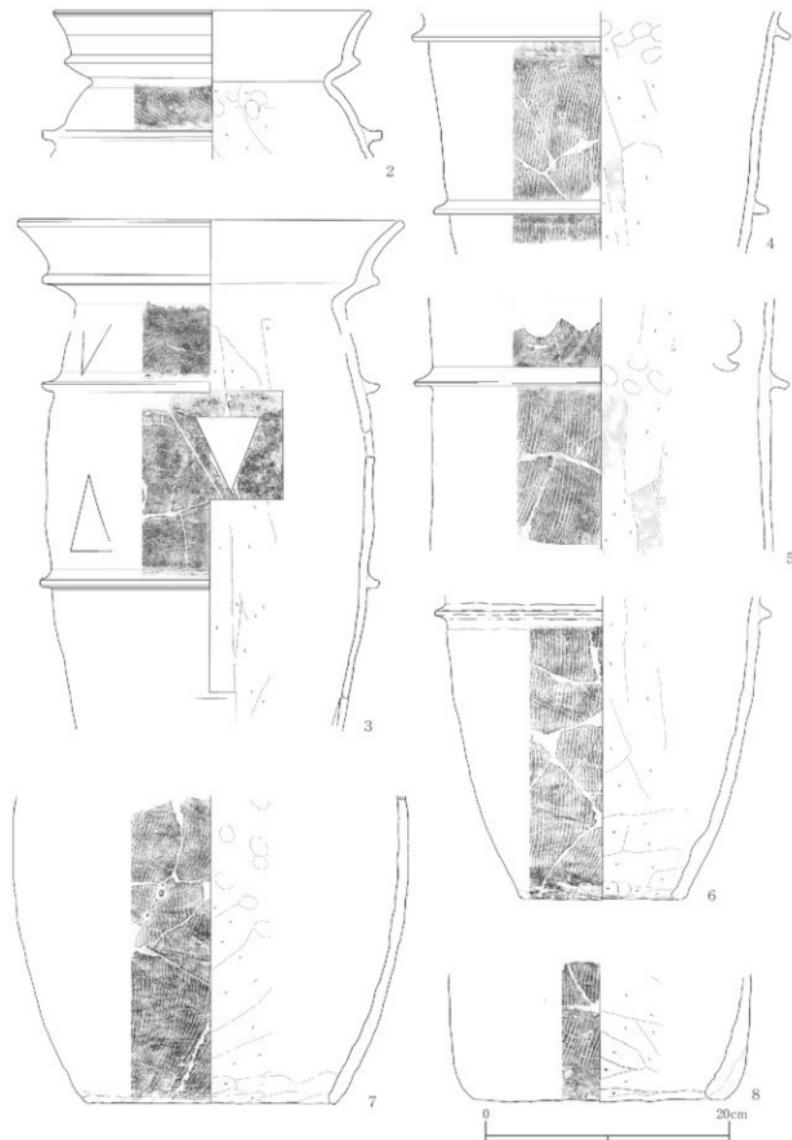
第23図-7(写真5-9)は底部第一段片。やはり内骨氣味にすばまる形で少なくとも25cm以上の高さがある。底部付近の垂みが強く復元径の精度には保留したい。外面は縦方向基調の粗いハケ調整。内面は斜方向のケズリ調整で器体の薄化につとめ、また下端の漬れを補正する。そのためケズリ調整は下端外面にわずかがら及んでいる。なお内面上半はケズリ調整後にナデないし指押さえを加える。

第23図-8は昨年度報告で壺形埴輪底部と推測した。本年度調査資料と接合し円筒「系」埴輪底部であることが判明した。内外面の調整は5-7と同様であるが、下端漬れ部分の整形は不十分。部分的に下端が内方に捲れ込む様に漬れている。約1/4周残存するが垂みがひどく復元径はやはり目安である。

第22図-1は接合した小片から図上復元したものである(写真4-1)。底部から第三段の概形が判る。突帯部の径は上下とも約32cm。やはり内骨氣味にすばまり底径は18cmと復元できた。第一段は非常に高くほとんど30cmに達する。第二段高は約17cmを図る。最下段にスカシ孔の形跡はないが、第二・第三段には各三孔ずつ円形基調のスカシ孔の存在が確認できる(写真4-1)。各段のスカシ孔間隔は多少不揃いだが、段あたり四方で縦列配置と復元できる。スカシ孔の全容を知りうる部分はないが、いずれも棘部のとりつく形態で、二方にそれを備えた変形巴形の可能性もある。線刻は伴わない。外面は全体として緻密な縦ハケ調整を施し、底部付近は部分的にこれをナデ消す。内面底部付近はやや粗雑な斜方向のケズリ。下端付近漬れを補正するが、不十分で器厚の差異が目立つ。底部段上半から第二段突帯直下付近まではかなり緻密な横方向のケズリ調整が及ぶが、第二段突帯付近以上はナデないし指押さえ仕上げとなる。外面赤色顔料塗布、ただし底部下半には及ばない可能性が高い。

以上、9トレンチから出土した円筒「系」埴輪を紹介した。二重口縁形態からまず器台形円筒埴輪との関係が想起されるであろう。しかしむしろ該期の壺類と通底するような二重口縁形態、および、内骨氣味にすばまる器体と口縁部を連結する頭部の形狀からは、彼我の系譜的連関を想定することを躊躇させる。現時点で全体形狀は定かではないが、とりあえずは次のように推測することができる。上から口縁部・頭部・中間段・底部よりなる。頭部は中間段の半分ないし2/3程度と短い。現時点で確定できないが中間段は二段構成の可能性が高い。下方に向かつてすばまる形と、あとで述べる底部様から、類推して三段以上を復原することは難しい。各段の高さは15～17cm程度、突帯部径は30cm内外を図る。底部は中間段の1.5～2倍に及び、際だって高い。また下端が強くすばまる形には後出時期の壺形埴輪を想起せるものがある。口縁部径は30cm程度で、中間段突帯径とさほど異ならない。以上から全体高は70～80cm程度と復原できる。このような形態からここではあえて円筒「系」埴輪と称した次第だ。頭部及び中間段にはスカシ孔を有す。各段とも四方程度と復原できる。底部段はスカシ孔を欠く可能性が高い。三角形スカシ孔はごく少ない。上記した第23図-3資料以外では二三の破片にその可能性が推測できるだけだ。スカシ孔の大半は円形基調を呈する。更にその多くは角部を派生させた巴形となるようだ。ただしその部分が不自然に肥大したり、二方に角が派生するものを含むなど、画一のかつ整った形とは言い難い。また一部にスカシ孔外縁を部分的に縁取る線刻文が付随する。文様の全貌は知り得ないが、既報告資料を含め、スカシ孔間を連結するように帶状に展開するものはない。

調整の面では、口縁部内外面は横ナデ仕上げ、頭部以下は原則として突帯貼付前に縦ハケ調整を施す。内面は事前にハケ調整を加える例もあるが概ねケズリ仕上げ、中位段では省略箇所もあるがとくに底部下端付近は丁寧に削り込み自家重漬れ部分の補正に努める。また総じて素地粘土には角閃石と雲母細粒を多量に含み、口縁部と頭部以下外面に赤色顔料を塗布する。ただし底部下半はこれを欠くと見られる。以上、9トレンチ出土の円筒「系」埴輪の概要を示した。(大久保)



第23図 船岡山古墳出土遺物実測図②

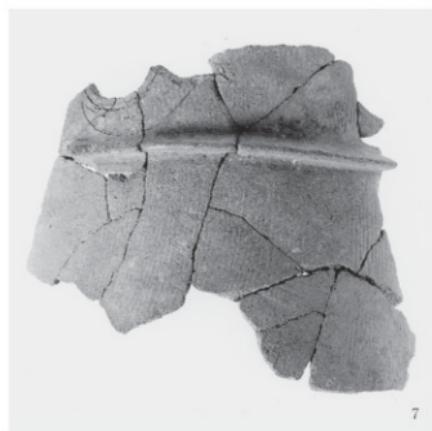
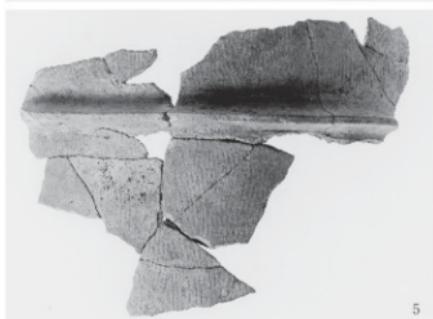
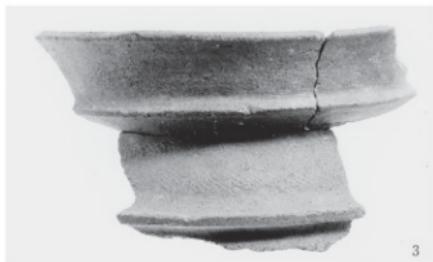


写真5 船岡山古墳出土遺物②

ごくぶんじちょう に い ち く 国分寺町新居地区

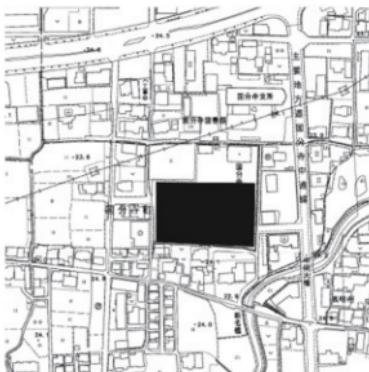
- 1 所 在 地 高松市国分寺町新居
- 2 調 査 期 間 平成 22 年 8 月 25 ~ 26 日
- 3 調査担当者 渡邊 誠
- 4 調査の原因 高松西部地域文化施設建設
- 5 調査の概要

対象地に十字にトレーナーを設定し、掘削を行った。対象地は本津川西側に位置し、周辺よりも標高が高いことから、遺跡の存在が予想されたが、地山面は 1.5m と深く、近代以降に大規模な造成が行われていたことが明らかとなった。

地山面では遺構および遺物は全く確認することができなかった。また、湧水も認められ、調査地東側に位置する本津川に伴う低地の範囲に含まれるものと考えられる。

6まとめ

以上の結果から、埋蔵文化財包蔵地ではないと判断し、事前の保護措置の必要はないものと判断した。



第 24 図 調査位置図

た ひ かみまちで ぐ ち ち く 多肥上町出口地区

- 1 所 在 地 高松市多肥上町
- 2 調 査 期 間 平成 22 年 8 月 27 日
- 3 調査担当者 渡邊 誠
- 4 調査の原因 多肥小学校校舎増築
- 5 調査の概要

対象地に 2 つのトレーナーを設定し、掘削を行った。対象地の北側に隣接して弥生時代の出口遺跡が所在しており、遺跡の存在が想定されていた。

調査の結果、近現代の擾乱が著しく、地山面が大きく擾乱されていた。地山が確認できた場合でも砂礫層で形成されている場合が多く、遺構および遺物は確認できなかった。周辺の地割りからも旧河道の範囲に含まれている可能性が高い。トレーナー西側で僅かに確認できたシルト質の地山部分に近世以降のものと考えられる遺構が僅かにあった。

6.まとめ

以上の結果から、埋蔵文化財包蔵地ではないと判断し、事前の保護措置の必要はないものと判断した。



第 25 図 調査位置図

じょうりあと 条里跡－香南町由佐地区－

- 1 所 在 地 高松市香南町由佐
- 2 調 査 期 間 平成 22 年 9 月 29 日
- 3 調 査 担 当 者 小川 賢
- 4 調 査 の 原 因 香南支所・コミュニティセンター整備事業

5. 調査の概要

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である条里跡の西端に位置するもので、香南支所内で予定されているコミュニティセンター整備工事に先立ち、包蔵状況の確認を行った。

調査の結果、中・近世以降の水田層と推定される堆積土が存在するものの、遺構・遺物とともにきわめて希薄であった。

6. まとめ

上記の結果より、当地点については埋蔵文化財の存在が希薄であったが、工事の規模・内容に応じた保護措置が望まれる。



第 26 図 調査地位置図

むれちょう むれあく 牟礼町牟礼地区

- 1 所 在 地 高松市牟礼町牟礼
- 2 調 査 期 間 平成 22 年 10 月 1 日
- 3 調 査 担 当 者 小川 賢
- 4 調 査 の 原 因 牟礼支所・コミュニティセンター整備事業

5. 調査の概要

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である鐘堂跡に隣接することから、工事に先立ち確認調査を実施した。トレレンチ掘削では、造成土および旧耕作土の下、現地表面より 3 m 以上にわたる河川の堆積が認められたのみで、遺構・遺物とも皆無であった。

6. まとめ

上記の結果より、事前の保護措置は必要ないものと判断した。



第 27 図 調査地位置図

くうこうあとちいせき 空港跡地遺跡－本村地区－

- 1 所 在 地 高松市上林町
- 2 調査期間 平成 22 年 10 月 28 日
- 3 調査担当者 波多野 篤・中西 克也
- 4 調査の原因 営業所建設工事
- 5 調査の概要

調査対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である空港跡地遺跡の隣接地にあたるため、事業者の任意の協力により工事に先行して、遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を実施した。

今回は、工事予定地内に南北方向のトレンチを 1 本設定し調査した。層序は、I 層は現代耕作土・床土、II 層は灰白色シルト質極細砂、III 層は黄灰色砂質粘土である。II 層は中世～近世にかけての耕作関連の土層、III 層は河川堆積を起源とする自然堆積層と考えられる。なお、トレンチ中央付近は北・南側よりもやや地形面が低く、その低地部には III 層の上位に弥生時代中期～後期の土器片を含む黒褐色～灰黃褐色シルト質極細砂が 25 ～ 45cm の厚さで堆積している（以下、遺物包含層とする）。

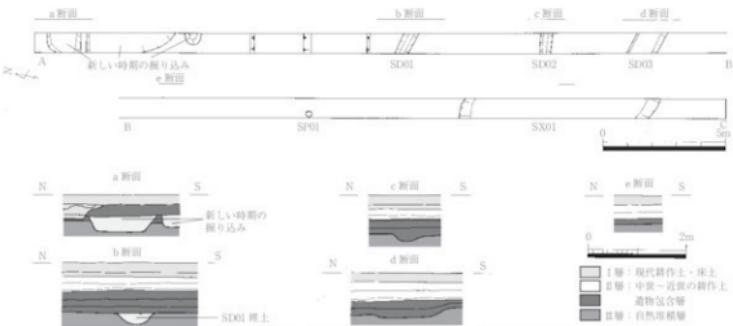
遺構面は III 層上面で、溝 3 条（SD01 ～ 03）、ピット 1 基（SP01）、性格不明の落ち込みを 1 基（SX01）検出した。SD01 ～ 03 は、東西方向に掘削された溝で、幅は 0.45 ～ 1.1 m、検出面からの深さは 0.15 ～ 0.2 m である。SD01 と SD03 からは土器片が出土した。SP01 はトレンチの南半に位置するピットで直径は 25cm である。SX01 は、南北方向の長さが約 8 m、検出面からの深さが約 35cm の掘り込みで、内部には多数の自然礫が含まれていた。遺構の性格については、調査した範囲では明らかにできなかった。

6まとめ

今回の試掘調査によって、当地に溝や柱穴などの遺構が分布することが明らかとなった。ただし、部分的な調査であるため遺構の時期は不明で、遺物包含層出土の土器が弥生時代のものであることや周辺の調査事例を考慮すれば、検出した遺構が弥生時代に帰属する可能性を考えることができる。以上の調査成果から、当地で開発行為が行われる場合は保護措置が必要であると考えられる。



第28図 調査位置図



第29図 平面図・断面図（平面図 1/200、断面図 1/100）

かみはやはんむらいせき 上林本村遺跡

1. 調査地 高松市上林町本村
2. 調査期間 平成22年12月6日
3. 調査担当者 船築紀子
4. 調査の原因 集合住宅建設
5. 調査の概要

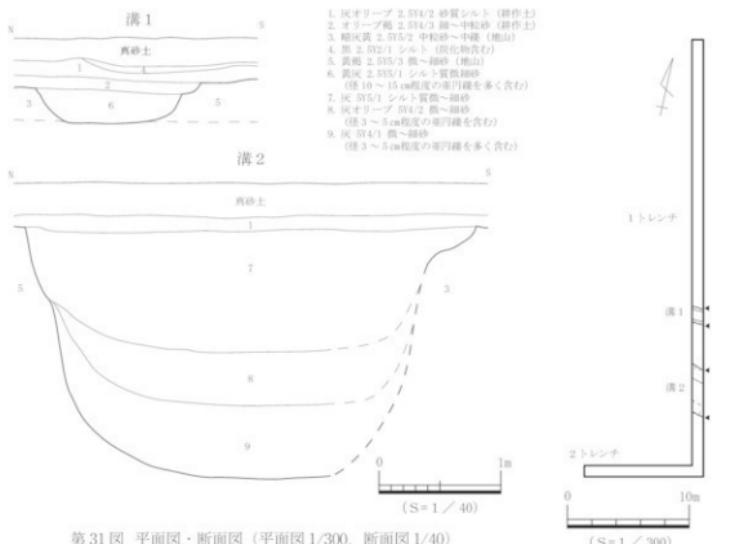
当地点は空港跡地遺跡・拝師廃寺等が隣接するため、遺構が分布する可能性があった。そのため集合住宅建設に先立ち、事業者の任意の協力を得て試掘調査を実施した。建物予定地の南北方向と東西方向の2箇所でトレンチの掘削を行った。

1トレンチでは溝を2条検出した。このうち溝1は幅約136m、深さ約0.28mの規模で直径10~15cm程度の亜円礫を多く含むことから、暗渠と考えられる。遺物は染付碗が出土した。溝2は幅約39m、深さ約2.0mの大型の溝で、埋土の状況から人為的に埋められたと考えられる。遺物は布目瓦(第32図1~5)・土師器片が出土しており、隣接する拝師廃寺に伴う遺構の可能性が考えられる。

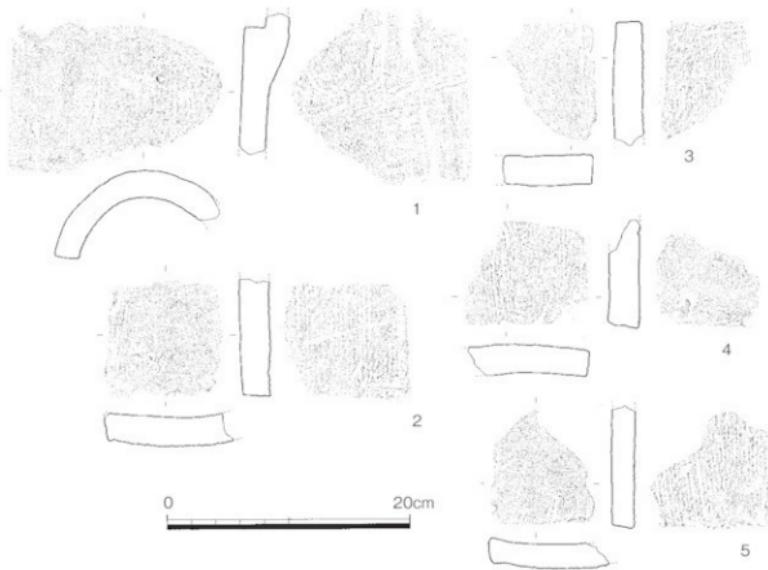
2トレンチでは遺構は検出できなかった。

6.まとめ

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるため、工事に際して事前の保護措置が必要である。なお事業者に確認調査の報告を行うとともに協議を行い、確認した遺構面については事業者の協力により、造成を行うことで工事掘削からの保護層を確保する措置が図られた。



第31図 平面図・断面図（平面図1/300、断面図1/40）



第32図 出土遺物実測図 (S=1/4)

かみはやしほんむらいせき 上林本村遺跡

- 1 所在地 上林町
2 調査期間 平成22年12月15日
3 調査担当者 波多野篤
4 調査の原因 集合住宅建設工事
5 調査の概要

当地点では、浄化槽を設置する2箇所で合計約25.5m²を調査した。層序は、I層は現代の造成土(厚さ約60~70cm)、II層は耕作土層(厚さ約10~20cm)、III層にはぶい黄色砂質粘土の自然堆積層で、遺物を含まない。なお、1トレンチではIII層の上に約30cmの厚さで黄灰色砂質粘土が堆積する。遺構検出面はIII層上面である。

1トレンチの遺構検査面までの深さは現地表面から約1m下で、調査区の南西隅で深さ約30cmの掘り込みを1基検出した。埋土から須恵器小片が1点出土した。2トレンチの遺構検査面までの深さは現地表面から約90cm下で、遺構・遺物



第33図 調査地位置図

6 まとめ

当地点では1トレンチで掘り込みを1基検出し、須恵器小片も出土したが、それ以外に遺構は認められなかった。なお、1トレンチの遺構については、試掘調査で遺構の記録を作成し保護措置を完了した。

じょうりあと 条里跡—香南町由佐地区—

1 所 在 地 高松市香南町由佐
 2 調査期間 平成 22 年 12 月 7 日
 3 調査担当者 渡邊 誠
 4 調査の原因 介護老人保健施設建設
 5 調査の概要

調査対象地は条里跡の一角に位置するが、詳細な包蔵状況は不明確であったため、事前の確認調査を実施した。トレーンチを建物建設予定地に L 字状に設定し、遺構の有無の確認を行った。

a) 基本層序

最上層から耕作土、床土、黄褐色粘土（地山）で、遺構面まで非常に浅い。

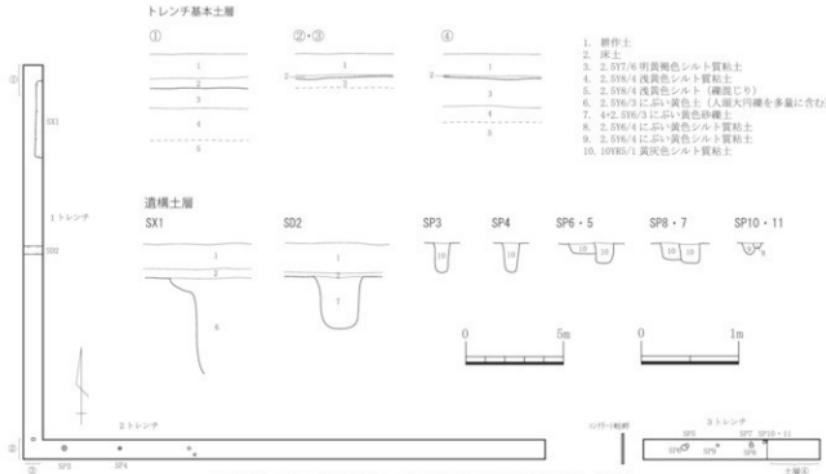
b) 遺構と遺物

建物跡を構成すると考えられる柱穴を確認し、須恵器の椀、土器師杯などが出土した（第 36 図

1～3）。これらの遺物から中世段階のものであることが判明した。この他、方形を呈すると考えられる大型土坑（SX1）からは、近世から近代のものと考えられる遺物が出土した。

6.まとめ

以上の成果から、対象地は埋蔵文化財包蔵地であることを再確認することとなった。そのため、開発に際しては事前の保護措置が必要であると考えられる。



第 36 図 出土遺物 (1/3)

第2章 平成21年度史跡天然記念物屋島基礎調査事業

しやきてんねんきねんぶつゆしま やしまのきあとうらちく 史跡天然記念物屋島 -屋嶋城跡浦生地区-

- 1 調査地 高松市屋島西町（浦生地区）
- 2 調査期間 平成22年1月14日～3月31日
- 3 調査担当者 小川賢・中村茂央
- 4 調査の概要

調査地は、屋島を南嶺と北嶺に分ける大谷の奥、標高100m付近に位置する。当地にある石壘の調査報告は大正時代に遡り、昭和9年に史跡天然記念物に指定される際にも「日本書紀」に記載された屋嶋城の遺構として評価されている。確認調査は昭和55年度に市教委が実施しており、約100mにわたり谷を遮断する状況が明確となつた。その後、山上では平成13年度の確認調査により城門跡が検出され、古代山城の評価が確定した。一方、浦生の石壘については更なる資料蓄積の必要性から、平成21年度より確認調査を実施することになった。

トレチ調査は、石壘内側において昭和55年度のトレチと重複させ設定し、土器の包蔵状況、土層堆積について再確認を行うとともに、石壘の構造を把握することを目的として実施した。堆積状況は、流土、盛土、地山層に大別できた。地山層は山側斜面に向かい成形されたように水平な堆積となり、石壘側では地形に沿って下降し、石壘の基盤には盛土が認められた。流土層は2分でき、一方は、地山直上に堆積する崩落土で安山岩を多量に含む砂質土から須恵器が出土した。もう一方は、この上位に間層を挟み堆積し、山側斜面と石壘との間に窪みを充填するもので、中世土器を包含する。

確認した遺構については、水平堆積した地山層と盛土層との間に幅約1.5m、深度0.3～0.4mの溝状遺構を確認した。位置関係から排水溝である可能性が挙げられるが、検出範囲が少ないため特定はできない。このほかに、トレチ南西隅において、石積みらしき石材を検出しているが、大半がトレチ北壁でみられる盛土層を切り込んでいること、現状の石壘が南側で大きく崩れていますから判断して、石壘が崩落した状態で埋没したものと推定できる。遺物には、地山層のほぼ直上で出土した須恵器平瓶があり、器形から7世紀後半のものと考えられる。最終埋没時の中世土器については土器皿・鍋類の小片が多く、既往の調査結果と同様の状況となっている。

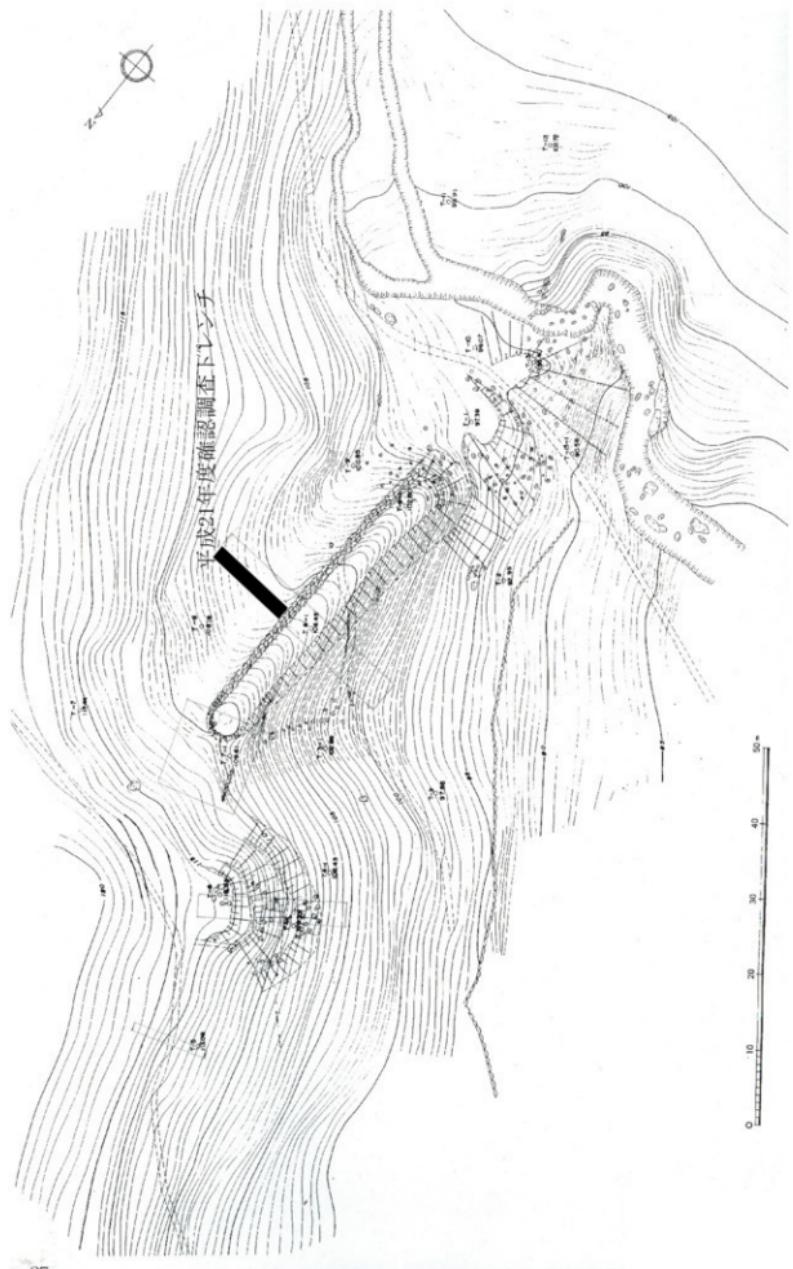
5まとめ

既往の出土品が中世土器のみであったことから、古代山城との関連が不明であったが、遺構の上限を築城時期まで上げることが可能となった。今後も調査の資料の蓄積により、山上の城壁遺構とあわせ、二重の防御機能をもつ城として明らかにする必要がある。

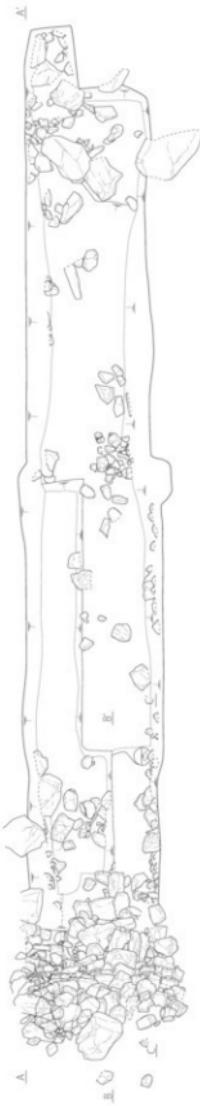


第37図 調査地位置図 (1/40,000)

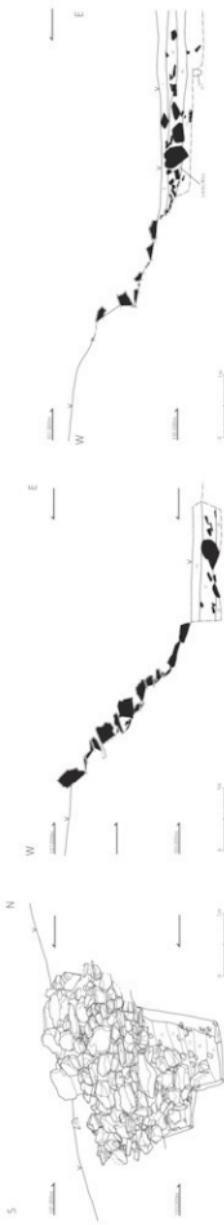
第38図 トレンチ配置位置図



A-A' 断面図



立面図



第39図 トレンチ平面・断面・立面図 (1/180)



写真6 トレンチ掘削状況



写真7 出土須恵器平瓶

報告書抄録

ふりがな	たかまつしないいせきはくつちょうさがいほう							
書名	高松市内遺跡発掘調査概報							
副書名	平成 22 年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第 131 集							
編著者名	小川賢・渡邊誠・高上拓・波多野篤・船塚紀子（高松市教委）大久保徹也（徳島文理大学）							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号 Tel. 087(839)2660							
発行年月日	平成 23 年 3 月 31 日							
所収調査	調査地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
神内城跡	西横田町	37201		34° 13' 39"	134° 4' 26"	H21. 12. 1 ~ 22. 3. 31	40 m ²	内容確認
高松城跡 (本町地区)	本町	37201		34° 20' 54"	134° 3' 14"	H22. 2. 16	32 m ²	事務所建設
前田西町平尾地区	前田西町	37201		34° 18' 9"	134° 7' 14"	H22. 2. 17	30 m ²	無線中継所新設
条里跡（香南町吉光地区）	香南町吉光	37201		34° 15' 5"	134° 0' 34"	H22. 3. 5	20 m ²	無線基地局新設
亀井戸跡	巣治屋町	37201		34° 20' 32"	134° 2' 55"	H22. 3. 16 ~ 4. 2	60 m ²	施設建築物建築工事
中林遺跡	林町	37201		34° 17' 35"	134° 4' 28"	H22. 4. 16	18 m ²	診療所・調剤薬局建設
築地町地区	築地町	37201		34° 20' 28"	134° 3' 26"	H22. 4. 30	23 m ²	中部バイパス第 3 竜線工事
香南町横井地区	香南町横井	37201		34° 14' 31"	134° 0' 21"	H22. 8. 18	7 m ²	幼保一体化施設建設
特別史跡讃岐国分寺跡第 38 次調査	国分寺町 国分	37201		34° 18' 9"	133° 56' 40"	H22. 8. 5	54 m ²	集合住宅建設
特別史跡讃岐国分寺跡第 39 次調査	国分寺町 国分	37201		34° 18' 7	133° 56' 43"	H22. 10. 20	15 m ²	下水管敷設
船岡山古墳 第 4・5 次調査	香川町大野・浅野	37201		34° 14' 58"	134° 01' 53"	H22. 2. 15 ~ 3. 10 H22. 8. 17 ~ 9. 9	10 m ²	内容確認
国分寺町新居地区	国分寺町 新居	37201		34° 17' 45"	133° 57' 33"	H22. 8. 25 ~ 8. 26	85 m ²	文化施設建設
多肥上町出口地区	多肥上町	37201		34° 17' 32"	134° 3' 10"	H22. 8. 27	26 m ²	小学校校舎増築
条里跡（香南町由佐地区）	香南町由佐	37201		34° 14' 24"	134° 0' 46"	H22. 9. 29	11 m ²	コミュニティーセンター整備
牟礼町牟礼地区	牟礼町牟礼	37201		34° 20' 16"	134° 8' 22"	H22. 10. 1	14 m ²	コミュニティーセンター整備
空港跡地遺跡 (本村地区)	上林町	37201		34° 17' 32"	134° 3' 55"	H22. 10. 28	43 m ²	営業所建設
上林木本道路	上林町	37201		34° 17' 24"	134° 3' 58"	H22. 12. 6	40 m ²	集合住宅建設

上林本村遺跡	上林町	37201		34° 17' 28"	134° 3' 57"	H22. 12. 15	26 m ²	集合住宅建設
条里跡（香南町由佐地区）	香南町由佐	37201		34° 14' 10"	134° 1' 18"	H22. 12. 7	60 m ²	介護老人保健施設建設
史跡天然記念物屋島	屋島西町	37201		34° 21' 50"	134° 5' 56"	H22. 1. 14 ~ 3. 31	29 m ²	内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神内城跡	城館	中世	柱穴、土坑、溝	陶磁器、土師質土器	
高松城跡（本町地区）	城館	近世	土坑ほか	陶磁器、土師質土器、瓦など	
前田西町平尾地区	—	—	—	—	
条里跡（香南町吉光地区）	条里	—	—	—	
亀井戸跡	井戸	近世～近代	石垣	陶磁器、瓦	上水施設の一部を検出
中林遺跡	集落	弥生時代後期	溝跡、ピット	弥生土器、土師器、石器未製品	
篠地町地区	—	—	—	—	
香南町横井地区	—	—	—	—	
特別史跡讃岐国分寺跡第38次調査	寺院	古代～近世	土坑、落ち込み	土器、瓦、サヌカイト片	
特別史跡讃岐国分寺跡第39次調査	寺院	古代～近世	土坑、落ち込み	土器、瓦、サヌカイト片	
船岡山古墳第4・5次調査	古墳	古墳時代前期前半	くびれ部	埴輪片	くびれ部の石列と多量の埴輪片を検出
国分寺町新居地区	—	—	—	—	
多肥上町出口地区	—	近世	土坑	陶磁器	
条里跡（香南町由佐地区）	条里	—	—	—	
牟礼町牟礼地区	—	—	—	—	
空港跡地遺跡（本村地区）	集落	弥生時代	溝、ピット	弥生土器	
上林本村遺跡	集跡	古代	溝	瓦、土師質土器	大型の溝を確認
上林本村遺跡	集落	古墳時代	土坑	須恵器	
条里跡（香南町由佐地区）	集落	中世	建物	土師器、須恵器	
史跡天然記念物屋島	城館	古代、中世	石垣、盛土、溝	須恵器、土師質土器	築城時期に相当する遺物を確認

高松市内遺跡発掘調査概報

－平成22年度国庫補助事業－

平成23年3月31日発行

編集・発行 高松市教育委員会

高松市番町一丁目8番15号

印刷 有限会社中央ファイリング